

徳富蘆花集

杉浦非水装幀

改造社版

昭和二年十月一日印刷
昭和二年十月五日發行

現代日本文學全集 第十二篇

著者 徳富健次郎

發行者 山本美

東京市麹町區内幸町一丁目參番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌

東京市麹町區内幸町一丁目參番地
幸ビルデイング壹階

改造社

振替 東京 八四〇
電話 銀座 座 一四一
電話 銀座 座 五七〇
電話 銀座 座 六八三

「徳富蘆花集」目次

巻頭寫眞（照 影）
題 言（筆 蹟）

不 如 歸 五

思 出 の 記 九 九

黒 潮 三 二 七

自 然 と 人 生 四 三 九

灰 燼 四 三 九

自然に對する五分時 四 五 〇

寫 生 帖 四 六 六

湘 南 雜 筆 四 六 三

風景畫家コロオ 五 〇 四

漁 師 の 娘 五 一 二

夏 の 夜 か た り 二 〇

五 分 時 の 夢 五 二 九

炬 燵 五 三 〇

國木田哲夫兄に與へて僕の近狀を報ずる書 五 三 一

梅 一 輪 五 三 六

綱 島 梁 川 君 五 四 九

印 度 洋 五 五 二

一 枝 の 筆 五 五 三

年 譜 五 五 六

私にはトの存を得る事なる。明治
三十二年の四月に於て。其社を會
社と改稱す。國民新聞の出一はト
の主人の熱心の花下なる事あり。其
時香保が出入り来る。自然なる。而も
香山の土を踏み来る。一回り及び。精も所
山は。一。の。三。も。中。迄。わ。た。
此。三。十。二。年。の。間。一。の。中。に。山
元。事。は。限。り。な。い。新。大。衆。の。會。小。山。目

日康然多し、日露然多し、世昌然、和香、
は富士山懐まてつ三石と山なり、社、
山甘、心、在、者、の、世、身、退、退、山、寂、心、身、の、
心、同、事、思、ふ、事、定、く、列、に、お、る、み、せ、あ、も、
而、く、和、は、六、十、の、盤、を、さ、り、水、墨、を、海、
庵、より、は、れ、入、る、を、脱、割、の、為、に、此、中、
者、保、つ、世、を、入、る、未、お、ま、より、い、流、不、お、得、る、
事、を、玉、に、通、る、念、歌、よ、お、つ、た、然、し、く、下、い、も、
新、し、い、出版、を、何、つ、く、脱、造、社、の、山、未、お、

不
如
歸

上
篇

(一)の 一

上州伊香保千明の三階の障子開きて、夕景色を眺むる婦人。年は十八九。品好き丸髷に結びて、草色の紙つけし小紋縮緬の被布を着たり。色白の細面、眉の間や、颯りて、頬のあたり肉寒げなるが、疵と云けすらりと静淑らしき人品、きを誇る桜花にあらず、ま

峯、入目を浴びて花やかにのぼり、雲二片蓬々然に聞ゆる時、三階の婦人は、

可き婦人。

子持、赤城の峯へすれば、ついで下すの聲までも金色の城の背より浮び、其行方を瞻視

りぬ。

兩手懐かにかき抱きつ可きふつくりと可愛氣なる雲は、徐ろに赤城の巔を離れて、遮る物もなき大空を相竝んで金の蝶の如く閃きつ、優々として足尾の方へ流れしが、やがて日落ちて黄昏寒き風の立つまに、二片の雲今は善哉色に縋ひつゝ、上下に吹き離され、漸次に暮るゝ夕空を別れに迎ると見しも暫時、下なるはいよく細りて何時しか影も残らず消ゆれば、残れる一片は更に灰色に縋ひて、朦朧と空にさまよひしが、果は山も空も唯一色に暮れて、三階に立つ婦人の顔のみぞ夕闇に白かりける。

(一)の 二

「御嬢——おや如何致しませう、また口が滑つて、おほゝゝゝ。あの、奥様、唯今歸りましてございます。おや、眞闇、奥様エ、何處に御出遊ばすのでございますか？」

「おや、ま、其處に。早く御入り遊ばせ。御風邪を召しますよ。旦那様はまだ御歸り遊ばしませんでゐますか？」

「如何遊ばしたんだらうね？」と障子を開けて内に入りながら、「何なら帳場へ其様言つて、御迎人をね——」

「左様でゐますよ」言ひつゝ手さぐりに襟すを擦りてランプを點くるは、五十あまりの老女。

折から階段の音して、宿の女中は上り來つ。

「おや、恐れ入ります。旦那様は大層御縁りでいらつしやいます。……はい、あの先刻若い者を御迎へに差上げましてゐいます。もう御歸りでゐいます。——御手紙が——」

「おや、御父上の御手紙——早く御歸りなされば宜い！」と丸髷の婦人はさも懐かし氣に表書を打かへし見る。

「あの、殿様の御狀で——早く伺ひたいものでゐますね、おほゝゝゝ、屹度また面白いことを仰つてでゐいます。」

女中は戸を立て、火鉢の炭をついで去れば、老女は風呂敷包を戸棚に仕舞ひ、立つて此方に來り、

「本當に冷えますこと！ 東京とは餘程違ひま

すでゝいますねエ」

「五月に櫻が咲いて居る位だからねエ。姥や、もつと此方へお寄りな」

「有り難うございます」云ひつゝ、老女はつく／＼顔打洗め、嘘の様でゝいますねエ。斯様に御丸髷に御結び遊ばして、整然と坐つて御出遊はすのを見ますと、ばあやが御育て申上げた御方様とは思へませんでゝいますよ、先奥様が御亡くなり遊ばした時、ばあやに負されて、母様母様ツて御泣き遊ばしたのは、昨日の様でゝいますかねエ」はら／＼と落涙し、「御興入の時も、ばあやはねエあなた、彼御立派な御容子を先奥様が御覽遊ばしたら、如何様に御嬉しかつたらうと思ひましてねエ」と襦袢の袖引出して眼を拭ふ。

此方も引入れるゝ様に俯きつゝ、火鉢に窮せし右手の指環のみ燦然と照り渡る。

やゝありて姥は面を上げつ。「御免遊ばせ、また此様な事を。おほゝゝ、年が寄ると愚癡つぽくなりましてねエ。おほゝゝ、御嬢——奥様も此までは色々御苦勞も遊ばしましたねエ。本當によく御辛抱遊ばしましたよ。最、最早此からは御目出度い事ばかりでゝいますよ、旦那様は彼通り御やさしい御方様——」

「御歸り遊ばしましてゝいます」とと女中の聲階段の口に響きぬ。

(一)の三

「やあ、草臥れた、草臥れた」

足袋草履脱ぎ棄てて、出迎ふ二人に一寸會釋しながら、廊下の上りて來し二十三四の洋服の男、提燈持ちし若い者を見返りて、「いや、御苦勞、御苦勞、其花は、面倒だが湯に浸けて置いて貰はうか」

「まあ、綺麗！」

「本當にま綺麗な踊踏でゝいますこと！」

那樣何處で御探り遊ばしました？」

綺麗だらう。そら、黄色いやつもある。葉が石楠に似とるだらう。明朝浪さんに活けて貰はうと思つて、折つて來たんだ。……どれ、すぐ湯に入つて來ようか」

「本當に旦那様は御活潑でいらつしやいますこと！」如何しても軍人の御方様は御遊ばしますねエ、奥様——

奥様は丁寧に疊みし外套を褌と接吻して衣桁にかけつゝ、たゞ含笑みて無言なり。

階段も踊と上る足音障子の外に絶えて、「あ

好い心地！」と入り来る先刻の壯夫。

「おや、旦那様最早御上り遊ばして？」

「男だもの。あはゝゝ」と快よく笑ひながら、妻がきまり惡げに被る大綯の襦袢引かけて、「失敬」と座蒲團の上に胡坐をかき、兩手に頬を撫でぬ。栗鼠の様に肥えし五分刈頭の、日にやけし顔は宛ながら然せる桃の如く、眉濃く眼いきいきと、鼻下に薄すり毛蟲程の疵は見えなから、まだ何處やらに幼な顔の残りて、含笑まる可き男なり。

「良人、御手紙が」

「あ、乃舅だな」

壯夫は一吋座様を直して、封を切り、中を出せば落つる別封。

「此は浪さんのだ——ふむ、御變りもないと見える……はゝゝ、滑稽を仰有るな……御話を聞く様だ」笑を含んで讀み終へし手紙を巻いて側に置く。

「卿にもよろしく。場所が變るから、持病の起らぬやうに用心おしつて御有つてよ」と浪さん

は饑を運べる老女を顧みつ。

「まあ、左様でゝいますか、有り難う存じます」

「さあ、飯だ飯だ、今日は握飯二個で終日歩

行きづめたつたから、腹が減つたつたら夥し

い。……はゝゝ。此あ何ちふ魚だな。鮎でもなしと……」

「山女とか申しましたつけ——ねえ姥や」

「左様？ 甘い、中々甘い、其れお代りだ」

「ほゝゝゝ、旦那様の御早うまいですこと」

「其筈さ。今日は榛名から相馬が嶽に上つて、それから二ツ嶽に上つて、屏風岩の下まで來ると迎へる者に會つたんだ」

「其様に御歩き遊ばしたの？」

「併し相馬が嶽の眺望は好かつたよ。浪さんに見せた位だ。一方は茫々たる平原さ、利根が遙かに流れてね。一方は所謂山又山さ、其上から富士がちよつぽり覗いてるなんぞは頗る妙だ。歌でも詠めたら、一つ人麿と腕比べをしてやる所だつた。あはゝゝゝ。そら今一つお代りだ」

「其様に景色が宜うまいですの。行つて見たうまいましたこと！」

「ふゝゝゝ、浪さんが上れたら、金鵒勳章をあげるよ。其あ危険い山だ、鐵鎖が十本も下つてるのを、つたつて上るのだからね。僕なんざ江田島で鍛へ上げた體で、今でもすはと云ふと橋でも綱でもぶら下る男だから、何でもないがね、浪さんなんざ東京の土踏んだ事もある

まい」

「まあ、彼様な事を——嬌然顔を赧らめ、此れでも學校では體操も致しましたし——」

「ふゝゝゝ、華族女學校の體操ぢや仕方ない。さうく、何時だつて、參觀に行つたら、琴たか何だかコロン／＼鳴つて、一方で『地球の上に國と云ふ國は』何とか歌ふと、女生が扇を持つて起つたり踊んだりぐるり廻つたりしとるから、踊の溫習かと思つたら、彼が體操さ！

あはゝゝゝ」

「まあ、御口がお悪い！」

「さうく。彼時山木の女と並んで、垂髪に結つて、ありあ何とか云つたつけ、葡萄酒の袴はいて澄まして躍つてたのは、たしか浪さんだつてけ」

「ほゝゝゝ。彼様な言を！ あの山木さんを御存じでいらつしやいますの？」

「山木はね、内の亡父が世話したんで、今に入しとるのさ。はゝゝゝ、浪さんが敗北したもんだから黙つてしまつたね」

「彼様な言！」

「おほゝゝゝ、其様に御夫婦喧嘩を遊ばしやいけません。さ、さ、御仲直りの御茶でまいすよ。ほゝゝゝ」

(三)

前同假に壯夫と云へるは、海軍少尉男爵川島武男と呼ばれ、此回良媒ありて陸軍中將子爵片岡毅とて名は海内に震へる將軍の長女浪子と目出度く合婚の式を挙げしは、つい先月の事にて、こゝ暫日の暇を得たれば、新婦と其實家よりつけられし老女の幾を連れて四五日前伊香保に來りしなり。

浪子は八歳の年賀母に別れぬ。八歳の昔なれば、母の容貌は歷々と覺えねど、始終笑を含みて居られしことと、臨終の其前に吾を臥床に呼びて、瘦せ細りし手に吾が小さき掌を握りしめ、「浪や、阿母は遠い處に行くからね、成人しくして、阿爺を大事にして、駒ちゃんを可愛がつて遣らなければなりませんよ。今五六年……」と云ひさしてはら／＼と涙を流し「阿母が在なくなつても阿母を記憶えて居るかい」と今は肩過ぎし吾黒髪其頃はまだ總ざりと額際まで剪り下げしをかい撫で／＼し玉ひし事も記憶の底深く彫りて思ひ出ぬ日はあらざりき。

一年程過ぎて、今の母は來つ。其れより後は何も彼も變り果てたることになりぬ。先の母は

歴としたる士の家より来しなれば、萬づ折目正しき風なりしが、其れにても彼の様に仲好き御夫婦は珍らしと婢の言へるを聴けることもありし。今の母は矢張歴とした士の家から来りしなれど、早くより英國に留學して、男まさりの上に西洋風の染みしなれば、何事も先とは打つて變りて、すべて先の母の名残と覺ゆるをば宛ながら打消す様に片確より改めぬ。父に對しても事毎に遠慮もなく語らひ論ずるを、父は笑ひて聞き流し「好々、乃公が負ぢや、負ぢや」と言はるゝが常なれど、或時極氣に入りの副官、難波と云へるを相手の晩酌に、母も來りて座に居しが、父はじろりと母を見てからゝと笑ひながら、「喃難波君、學問の出来る細君は持つもんぢやごわはん、いや散々な目に遭はされますぞ、あはゝゝ」と云はれしとか。流石の難波も母の手前、何と挨拶もし兼ねて手持無沙汰に盃を上げ下げして居しが、其後己が細君に呉も女兒共には書物を讀み過ごさせな、高等小學卒業で澤山と云ひ含められしとか。

浪子は幼きより至つて人なつくく、しかも伶俐に、香爐峯の雪に簾を捲く程ならずとも、三つの頃より姪に抱かれて見送る玄關に吾れから帽をとつて阿爺の頭に載す程の氣は利きたり。

仲びむゝとする幼な心は、譬へば春の若菜の如し。假令一度雪に降られしとて、蹊蹢だにせられずば、日づから雪融けて青々とふるなり。慈母に別れし浪子の哀は子供には似ず深かりしも、後の日だに照りたらば苦もなく育つ筈なりき。東娶に結ひて、側へ寄れば香水の香の立ち迷ふ、眼少し釣りて口大きな今の母を、初めて見し時は、流石に少ししたじろぎつるも、人なつこき浪子は此母君にだに慕ひ寄る可かりしに、繼母は吾れから挟む一念に可愛き兒をば押隔てつ。世馴れぬ吾儘者の、學問の誇り、邪推、嫉妬さへ手傳ひて、まだ八つ九つの可愛兒を心ある大人なんどの様に相手にするより、此方は取つく島もなく、寒き淋しきは心に浸みぬ。あゝ愛されぬは不幸なり、愛することの出来ぬは猶更に不幸なり。浪子は母あれども愛するを得ず、妹あれども愛するを得ず、唯父と姪の幾と實母の姉なる伯母はあれど、何を云ひても伯母は餘所の人、幾は召使の身、其れすら母の眼常に注ぎてあれば、少しよくしても、して貰ひても、互に最良の引倒し、却て爲めにならず、唯父こそは、父こそは渾身愛に満ちたれど、其父中將すらも流石に母の前をばかねらぬゝ、其も思へば慈愛の一つなり。されば母の前では餘

儀なく叱りて、臨へ廻れば言葉少なく情深くいはる父の人知らぬ苦心、伶俐き浪子は十分に酌んで、あゝ嬉しい忝じけない、何卒身を粉にしても父上の御爲めにと心に思は溢るれど、氣がつく程にすれば母は自身の領分に踏み込まれたる様に氣を悪くするが辛く、光を頼みて言寡に氣もつかぬ體に控へ目にして居れば、却て意地悪のやれ鈍物のと思はれ言はるゝも情無し。或時は聊かの間違より、流るゝ如き長州藩に英國仕込の論理法もく消々と云ひ捲られ、己のみかは亡母の上までもおぼろ氣ならず中傷られて、流石に口惜しく噛んだ屑開かんとしては縁側にちらりと父の影見ゆるに口を嚙み、或はまたあまり無理なる邪推されては「母さまもあんまりな」と窓帷の陰に泣いたることもありき。父ありと云ふや。父はあり。愛する父はあり。然りながら家が世界の女の兒には、五人の父より一人の母なり。其母が、其母が此通りでは、十年の間には癖もつく可く、覽も失すべし。「本當に彼女は些もさつぱりした所がない、いやに執念な人だよ」と夫人は常に罵りぬ。あゝ土鉢に植ゑても、高麗交趾の鉢に植ゑても、花は花なり、何れか日の光を待たざるべき。浪子は實に日陰の花なりけり。

されば此たび川島家と縁談整ひて、奥入済みし時は、浪子も息をつき、父中將も、御母も、伯母も、皆それ／＼に息をつきぬ。

「奥様浪子の繼母は御自分は派手が御好きな癖に、御嬢様には嫌な、ぢみなものばかり、買つて御あげなさる」と毎に呟きし娘の幾が、嫁入支度の薄きを氣にして、先奥様が御出になつたらとかき口説いて泣きたりしも、浪子は勿々として吾家の門を出でぬ。今迄知らぬ自由と樂しさの此さきに待つとし思へば、父に別るゝ哀さも聊か慰めらるゝ心地して、勿々として行きたるなり。

(三) の 一

伊香保より水澤の觀音まで一里あまりの間は、一條の道、蛇の如く禿山の中腹に沿うてうねり、唯二ヶ所ばかり山の裂目の谷をなせるに陥りてまた這ひ上れる外は、眼をねむりても行かる可き道なり。下は赤城より上毛の平原を見晴らしつ。此處等あたりは一面の草原なれば、春の頃は野燒の痕の黒める土より、さまざまの草薺萩桔梗女郎花の若芽など、生え出でて毛氈を敷けるが如く、美しき草花其間に咲き

亂れ、綿帽子着た銀巻、ひよとりとした旗、此處も其處もたちて、一たび此處に下り立たば春日の日の永きも忘る可き處なり。

武男夫婦は、今日の晴の祓狩すとて、娘の幾と宿の女中を一人伴れて、午食後より此處に來しと見え、女中に持たせし毛布を草の軟かなる處に敷かせて、武男は靴ばきのまゝごろりと横になり、浪子は麻裏草履を脱ぎ桃紅色の手巾にて二つ三つ膝のあたりを掃ひながらふはりとして、「おゝ軟か！ 勿體ない様でういますね」

「ほゝゝ、お嬢——あらまた、御免遊ばせ、お奥様の好い御顔色に御なり遊ばしましたこと！そして彼様に御唱歌なんぞ御歌ひ遊ばしたのは、本當にお久し振りでういますね」と幾は嬉し氣に浪子の横顔を覗く。

「餘り歌つて何だか渴いて來たよ」
「御茶を持つて參りませんで」と女中は風呂敷解きて夏蜜柑、袋入りの乾菓子、折詰の巻餅など取り出す。

「何、此があれば茶は入らんさ」と武男は衣兜よりナイフ取り出して蜜柑を剥きながら、「如何だい浪さん、僕の手際には驚いたらう」

「彼様な言を仰有るわ」
「旦那様の御探り遊ばしたのは、妙權が澤山雜つて戻りましてういますよ」と女中が口を出す。

「馬鹿を言ふな。負惜みをするね。はゝゝ。今日は實に愉快だ。好い天氣ぢやないか」
「綺麗なき空ですこと、碧々して、本當に小袖にしたい様でういますね」
「水兵の服には猶宜からう」
「おゝ、好い香！ 草花の香でせうか、あ、雲雀が鳴いてますよ」
「さあ、御餅を戴いて御腹が出來たら、今一持して來ませうか、ねエ女中さん」と幾は宿の女を促し立て、また祓狩りにかゝりぬ。

「些し残しといひ呉れんとならんぞ——健な婆ぢやないか、ねエ浪さん」
「本當に健でういますよ」
「浪さん、草臥れはしないか」
「否、些も今日は疲れませんの、わたくし此様に楽しいことは初めて！」

「遠洋航海などすると随分好い景色を見るが、併し此様な高い山の見晴はまた別だね。實に爽々するよ。そら其處の左の方に白い壁が閃々するだらう。あれが來時に浪さんと晝飯を食つ

浪子は竊と武男の膝に手を投げて溜息つき
 一何時までも斯うして居たうゝいますこと！」
 黄色の蝶二つ浪子の袖を掠めてひら／＼と飛
 び行きしあとより、さわ／＼と草踏む音して、
 帽子被りし影法師突然に夫婦の眼前に落ち來り
 ぬ。

新來の客は二十六七にや。陸軍中尉の服を着たり。軍人には珍らしき色白の好男子、惜しきことには、口のあたり何處となく聳し氣なる所ありて、黒水晶の如き眼の光鋭く見つめらる

III. ③ (III)

突然で、喫驚だらう。實は昨日用があつて高崎に泊つて、今朝澁川まで来たんだが、伊香保は一足と聞いたから、一寸遊びに来たのさ。それはから宿に行つたら、君達は蕨探の御遊と聞いたら、路を教はつて遣つて来たんだ。なに、明日は歸らなけりやならん。邪魔に來た様だな。

「昨日一寸寄つて来た。叔母様も元氣で居な
 される。が、最早君達が歸りさうなものだつて類
 りに呟して居なすツたッけ。——赤坂の方でも
 御變りもありませんです」と例の黒水晶の眼は
 燐乎と浪子の顔に注ぐ。

先刻から赧らめし顔は一入紅うなりて浪子は
 下向きぬ。

「さあ、援兵が来たから最早敗れないぞ。陸海軍一致したら、娘子軍百萬ありと雖も恐るゝに足らずだ。——なにさ、先刻から此御婦人方が我輩一人を宥めて、やれ蕨の採り方が少ないの採つたが蕨ぢやないだの、惡口つて困つたんだ」と武男は頭もて今來し姥と女中を指す。

「乃公が先刻電報かけて加勢に呼んだんだ」

「うん、其が宜い、其が宜い、千々岩君も来たか
ら、澤山御馳走するんだ。其積りで腹を減らし
て来るぞ。はゝゝゝ、なに、浪さんも歸る？」

引とめられて浪子は居残れば、幾は女中と荷物になる可き毛布蕨など收拾めて歸り行きぬ。

上
中

夕日は物聞山の肩より花やかに射して、道の
左右の草原は萌黄の色燃えんとするに、其處此
處に立つ孤松の影長々と横はりつ。眼をあぐ

れば、遠き山々靜かに夕日を浴び、麓の方は夕煙諸處に立ち上る。遙か向うを行く草負牛の、叱られて呻と鳴く聲空に満ちぬ。

武男は千々岩と竝びて話しながら行くあとより浪子は従ひて行く。三人は徐かに歩みて、今しも壑を渉り終り、坂を上りて眩き夕日の道に出でつ。

武男は忽然足を止めぬ。

「やあ、失策つた。ステツキを忘れた。なに、先刻休んだ處だ。待つて呉れ玉へ、一走り取つて来るから——なに、浪さんは待つてれば宜いぢやないか。直ぐ其處だ。全速力で駆けて来る」

と武男は強ひて浪子を押とめ、手巾包の藏を草の上にさし置き、急ぎ足に坂を下りて見えなくなりぬ。

(三) の 三

武男が去りし後に、浪子は千々岩と一間ばかり離れて無言に立ちたり。頗て谷を渉りて彼方の坂を上り果てし武男の姿小さく見えたりしが、またち忽彼方に向ひて消えぬ。

「浪子さん」
彼方を望み居し浪子は、耳元近き聲に呼びか

けられて思はず身を震はしたり。

「浪子さん」

一歩近寄りぬ

浪子は二歩引下りて、餘成なく顔をあげえりしが、例の黒水晶の目にひたと熟視められて、側向きたり。

「御目出度う」

此方は無言、耳までさつと紅になりぬ。

「御目出度う。イヤ、御目出度う。併し目出度くない奴も何處かに居るすがね。へーへー」

浪子は俯き、杖にしたる海老色の洋傘の尖もてしきりに草の根を扶りつ。

「浪子さん」

蛇に食糞らるゝ栗鼠の今は是非なく顔を上げたり。

「何でムいます？」

「男爵に金、は矢張りいものですよ。へーへーへー、いや御目出度う」

「何を仰有のです？」

「へーへー、華族で、金があれば馬鹿でも嫁に行、金がなけりや如何様に慕つても唾もひツ

かけん、ね、此れが當今の姫御前です。へーへー、浪子さんなんぞ其様な事はないですがね」

浪子も流石に血相變へて屹と千々岩を睨みた

り。

「何を仰有ンです。失敬な。今一度武男の目前で言つて御覽なさい。失敬な。男らしく父に相談もせずに、無禮千萬な艶書を吾に遣つたりナンゾ。最早此から決して容赦はしませぬ」

「何ですと？」千々岩の額は眞暗くなり來り、

唇を噛んで、一歩二歩寄らむとす。

突然に嘶く聲足下に取りて、馬上の半身坂より上に見え來りぬ。

「ハイ——ッ。御邪魔ががすよ。ハイ

ハイ——ッ」と馬上なる六十あまりの老爺、頬被りをとりながら、怪しげに二人の容子を見かけり見かけり行き過ぎたり。

千々岩は立ちたるまゝに、動かず。額の條はやゝ舒びて、結びたる唇の邊に冷笑のみぞ浮びたる。

「へーへー、御迷惑なら御返しなさい」

「何をですか」

「何が何をですか、御嫌ひなものを！」

「ありません」

「なぜないのです」

「汚らわしいものは焼き棄ててしまひました」

「いよ——ですな。別に見た者は屹度ないです

か」

「ありません」

「いよ／＼ですか」

「失敬な」

浪子は忽然として放ちたる眼光の、彼が眞黒き眼の凄じきに見返されて、不快に得堪へず慄然と震ひつゝ、遙かに眼を翳しぬ。恰も其時谷を隔てし彼方の坂の口に武男の姿見え来りぬ。顔一點朱の如く赭く夕日に閃きつ。

浪子はほつと息つきたり。

「浪子さん」

千々岩は驚りずまに彼方此方逸らす浪子の眼を追ひつゝ、「浪子さん、一言ぶつて置くが、秘密、何事も秘密に、な、武男君にも、御両親にも、で、なけりや——後悔しますぞ」

電の如き眼光を浪子の面に射つゝ、千々岩は身を轉じて、俛して其處らの草花を摘み集めぬ。

靴音高く、ステッキ打振りつゝ坂を上り來し武男、「失敬、失敬、お苦しい、走りづめだッたから。併しあつたよ。ステッキは。——う、浪さん、如何にかしい、ひどく顔色が悪いぞ」千々岩は今摘みし草の花を胸の紐飾に挿しながら、

「なに、浪さんはね、君が餘り隙取つたもん

だから、大方迷子になつたんだらうツて、ひどく心配しなすつたんさ。はッはッ／＼」

「あは／＼。其様か。さあ、徐々歸らうぢやないか」

三人の影法師は相竝んで道邊の草に曳きつゝ、伊香保の方に行きぬ

(四) の 一

午後三時高崎發上り列車の中等室の一隅に、人無きを幸ひ、靴ばきのまゝ腰掛の上に足さしのばして、巻其を吹しつゝ、新聞を読み居るは千々岩安彦なり。

手荒く新聞を投げやり、

馬鹿の間の言より言ふ拍子に落ちし巻其を腹立し氣に踏消し、窓の外に唾はきしまゝ暫らく佇みて居たるが、頓て舌打鳴らして、室の全長を二三度往來して、また腰掛に戻りつゝ、手を拭きて、眼を閉ぢぬ。

眞黒き眉は一文字にぞ寄りたる。

千々岩安彦は孤なりき。父は鹿兒島の藩士にて、維新の戦争に討死し、母は安彦が六歳の

夏其頃霍亂と云ひける虎列刺に斃れ、六歳の孤兒は叔母——父の妹の手に引取られぬ。父の妹は即ち川島武男の母なりき。

叔は母流石に少しは安彦を憐みたれども、叔父はこれを厄介者に思ひぬ。武男は仙臺平の被穿着て儀式の座につく時小倉袴の姿えたるを着て下座にすくまされし千々岩は、身は武男の如く親、財産、地位などのあり餘る者ならずして、全く吾拳と吾智慧に世を渡る可き者なるを早く悟り得て、武男を惡み、叔父を怨めり。

彼は世波の道に裏と表の二條あるを見ぬきて、如何なる場合にも捷徑をとりて進まんことを誓ひぬ。されば叔父の蔭によりて陸軍士官學校にありける間も、同窓の者は試験の點數のと騒ぐ間に、千々岩は郷黨の先輩にも出入り斷なく、苟くも交るに身の便宜になる可き者を選び、他の者共が卒業證書握りて吻と息つく間に、早くも手蔓つたうて陸軍の主腦なる參謀本部の圍ひ内に乗り込み、外同窓生は彼方此方の中隊附となりてそれ練兵やれ行軍と追ひつかはるゝに引かへて、千々岩は參謀本部の階下に煙吹して戲談の間に軍國の大事も或は耳に入る羨しき地位に集くひとり。

此上は結婚なり。猿猴のよく水に下るはつた

げる手あるが爲め、人の立身するはよき縁あるが爲めと、早くも知れる彼は、戸籍吏ならねども、某男爵は某侯爵の婿、某學士兼高等官は某伯爵の婿、某富豪は某伯の子息の養父にて、某侯の子息の妻も某富豪の女と暗に指を折りつつ、早くも其處此處と配れる眼は片岡陸軍中將の家に注ぎぬ。片岡中將とし云へば、當時豫備にこそ居れ、馳名天下に隠れなく、畏きあたりの御覺えもいとめでたく、度量瀾大にして、誠に國家の干城と云ひつ可き將軍なり。千々岩は早く此將軍の隠然として天下に重き勢力を見ぬきたれば、聊か便を求めて次第に近寄り、如才なく奥にも取り入りつ。眼は直ちに第一の令嬢浪子を睨みぬ。一には父中將の愛自づから尤も深く浪子の上に注ぐを速早く看取りし故、二には今の奥様は自づから浪子を疎みて何處にもあれ縁あらば早く片付けたき様子を見たる爲め、三にはまた浪子の憤深く氣高きを好ましく思ふ念も雜りて、即ち其人を目がけしなり。斯くて様子を見るに中將は所謂喜怒容易に色に形はれぬ太腹の人なれば、何と思はるゝかは一寸測り難けれど、奥様の氣には確かに入りたり。二番目の令嬢の名はお駒として少し跳ねたる三五の少女は殊に吾と仲好なり。其

下には今の奥様の腹にて、二人の子供あれど、此は問題の外としてこゝに老女の幾とて先の奥様の時より勤め、今の奥様の興入後奥室所の大更迭を行はれし時も中將の聲がかりにて一人居残りし女、此が始終浪子の側につききて吾子に好意の乏しきが邪魅なれど、何有、本人の浪さへ攻め落さばと、千々岩はやがて一年ばかり機会を睨みしが、今は待ちあぐみて或日宴會歸りの酔まぎれ、大膽にも一通の艶書二重封にして表書を女文字に、故らに郵便をかりて浪子に送りつ。

其日命ありて俄かに遠方に出張し、三月あまりにして歸れば、吾輩守に浪子は貴族院議員加藤某の媒妁にて、人もある可きに吾從弟川島武男と結婚の式已に済みてあらむとは！思はぬ不覺をとりし千々岩は、腹立まぎれに、色よく返事斯の様にと心に祝ひて土産に京都より買うて來し友染縮緬す々に引裂きて屑籠に投げ込みぬ。

然りながら千々岩は如何なる場合にも全へ吾を忘れたる男にあらざれば、忽ちにして敗餘の兵を収めつ。唯心外なるは此上彼艶書の一條若し浪子より中將に武男に漏れなば大事の便宜を失ふ恐れあり。持込みよき浪子の事なれ

ば、まさかと思へどまた覺束なく、高崎に用ありて行きしを幸ひ、それとなく伊香保に滞留する武男夫婦を訪うて、やがて探りを入れたるなり。

思ふしきは武男——

「武男、武男」と耳近に誰やら呼びし心地して、愕と眼を開きし千々岩、窓より覗けば、列車はまさに上尾の停車場にあり。驛夫が、「上尾上尾」と呼びて過ぎたるなり。

「馬鹿なッ！」

獨り自から置りて、千々岩は起ちて三度車室を往き戻りつ。心に纏ふ或ものを振り落さむとする様に身震ひして、座に復りぬ。冷笑の影、眼にも唇にも浮びたり。

列車は又も上尾を出でて、疾風の如く馳せつつ、幾驛か過ぎて、王子に着きける時、プラットフォームの砂利踏みになりて、五六人ドヤドヤと中等室に入り込みぬ。中に五十あまりの男の、一樂の上下揃ひ白縮緬の兵兒帯に岩丈な金鎖を晃かせ、右手の指に分厚な金の指環を挿し、緒顔の眼尻著しく垂れて、左の眼下にしたゝかなる赤黒子あるが、腰かくる拍子にフツと眼を見合せつ。

「やあ、千々岩さん」

「やあ、此は……」

「何地へ御出でしたか」云ひつゝ赤黒子は立つて千々岩が側に腰かけつゝ。

「はあ、高崎まで」

「高崎の御歸途ですか」一寸千々岩の顔を眺め、少し聲を低めて、「時に御急ぎですか。でなけりや夜食でも御一處にやりませう」千々岩は頷きたり。

(四) の 二

橋場の渡のほとりなる唯有る水莊の門に山木兵造別邸とあるを見ずば、某の待合かと思はる可き家作の、加之音緒の響しめやかに婀娜めきたる島田の障子に映るか、左もなくば紅の毛氈敷かれて花牌など落ち散るに相應しかる可き二階の一室に、わざと電燈の野暮を避けて例の和洋行燈を据ゑ、取り散らしたる盃盤の間に、胡坐をかけるは千々岩と今一人の赤黒子は、間ふまでもなき當家の主人山木兵造なる可し。遠けしにや、側に侍る女もあらず、赤黒子の前には小形の手帳を廣げたり、鉛筆を添へて。番地官名など細かに肩書して姓名数多記せる上に、鉛筆にてさま／＼の符號つきたり。丸。四

角。三角。イの字。ハの字。五六七などの數字。或は羅馬數字。點かけたるもあり。一度消してイキルとしるしたるもあり。

「夫れぢや千々岩さん、其方は其ときめて置いて、いよ／＼定まつたら直ぐ知らして呉れたまへ。——大丈大間違はあるまいね」

「大丈夫さ、最早大臣の手許まで出て居るのだから。併し何しろ競争者が始終運動しとのだから例の思ひ切つて撒かんといけない。此だがね、此奴中々喰へない奴だ。しツかり善を衛まさんと宜けないぜ」と千々岩は手帳の上の一の名を指しぬ。

「此あ如何だね？」

「其奴は話せない奴だ。僕はよく識らないが、ひどく頑固な奴ださうだ。先正面から平身低頭で往くのだな。悪くすると失策るよ」

「いや陸軍にも、分つた人もあるが、實に話の出来／＼男も居るね。去年だつた、師團に服を納めるンで、例の筆法でまあ大概は無事に通つたのはよかつたが、あら何とか云つたツケ、赤髯の大佐だつたがな、其奴が何の彼の難癖つけて困るから、番頭をやつて例の菓子箱を出す、馬鹿奴、賄賂なんぞ取るものか、軍人の體面に關するなんて威張つて、到頭のつまりあ菓子箱

を蹴飛ばしたと思ひなさい。例の上層が干菓子で、下が銀貨だから、たまらないさ。紅葉が散る、雪が降る、座敷中——の雨だらう。すると其奴めいよ／＼腹立てやがって、汚らはしいの、やれ告發するのなんの吐かしやがるさ。漸と結局をつけはつけたが、大骨折らしアがったね此様な先生が居るから馬鹿々々しく事が面倒になる。いや面倒と云ふと武勇さんなぞが矢張此流で、實に話せないに困る。先日も——」